

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ  
(例) 編輯者《へんしゅうしゃ》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号  
(例) 出発|前《まえ》に

[ # ]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定  
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)  
(例) [ # 「禾+槇のつくり」、第3水準1-89-46 ]

-----  
編輯者《へんしゅうしゃ》 支那《シナ》へ旅行するそうですね。南ですか？ 北ですか？  
小説家 南から北へ周《めぐ》るつもりです。  
編輯者 準備はもう出来たのですか？  
小説家 大抵《たいてい》出来ました。ただ読む筈だった紀行や地誌なぞが、未だに読み切れないのに弱っています。  
編輯者 (気がなさそうに) そんな本が何冊もあるのですか？  
小説家 存外ありますよ。日本人が書いたのでは、七十八日遊記、支那文明記、支那漫遊記、支那仏教遺物、支那風俗、支那人気質、燕山楚水《えんざんそすい》、蘇浙小観《そせつしょうかん》、北清《ほくしん》見聞録、長江《ちょうこう》十年、観光紀游、征塵録《せいじんろく》、満洲、巴蜀《はしょく》、湖南《こなん》、漢口《かんこう》、支那風韻記《しなふういんき》、支那  
編輯者 それをみんな読んだのですか？  
小説家 何、まだ一冊も読まないのです。それから支那人が書いた本では、大清一統志《たいしんいつとうし》、燕都遊覧志《えんとゆうらんし》、長安客話《ちょうあんかくわ》、帝京《ていきょう》  
編輯者 いや、もう本の名は沢山です。  
小説家 まだ西洋人が書いた本は、一冊も云わなかったと思いますが、  
編輯者 西洋人の書いた支那の本などには、どうせ碌《ろく》な物はないでしょう。それより小説は出発|前《まえ》に、きっと書いて貰えるでしょうね。  
小説家 (急に悄気《しょうげ》る) さあ、とにかくその前には、書き上げるつもりでいるのですが、  
編輯者 一体|何時《いつ》出発する予定ですか？  
小説家 実は今日《きょう》出発する予定なのです。  
編輯者 (驚いたように) 今日ですか？  
小説家 ええ、五時の急行に乗る筈なのです。  
編輯者 するともう出発前には、半時間しかないじゃありませんか？  
小説家 まあそう云う勘定《かんじょう》です。  
編輯者 (腹を立てたように) では小説はどうなるのですか？  
小説家 (いよいよ悄気《しょうげ》る) 僕もどうなるかと思っているのです。  
編輯者 どうもそう無責任では困りますなあ。しかし何しろ半時間ばかりでは、急に書いても貰えないでしょうし、.....  
小説家 そうですね。ウェデキンドの芝居だと、この半時間ばかりの間《あいだ》にも、不遇の音楽家が飛びこんで来たり、どこかの奥さんが自殺したり、いろいろな事件が起るのですが、 御待ちなさいよ。事によると机の抽斗《ひきだし》に、まだ何か発表しない原稿があるかも知れません。  
編輯者 そうすると非常に好都合ですが  
小説家 (机の抽斗を探しながら) 論文ではいけないでしょうね。  
編輯者 何と云う論文ですか？  
小説家 「文芸に及ぼすジャナリズムの害毒」と云うのです。  
編輯者 そんな論文はいけません。  
小説家 これはどうですか？ まあ、体裁の上では小品《しょうひん》ですが、  
編輯者 「奇遇《きぐう》」と云う題ですね。どんな事を書いたのですか？

小説家　ちょっと読んで見ましょうか？　二十分ばかりかかれれば読めますから、

×

×

×

至順《しじゅん》年間の事である。長江《ちょうこう》に臨んだ古金陵《こきんりょう》の地に、王生《おうせい》と云う青年があった。生れつき才力が豊かな上に、容貌《ようぼう》もまた美しい。何でも奇俊《きしゅん》王家郎《おうかりう》と称されたと云うから、その風采《ふうさい》想うべしである。しかも年は二十《はたち》になったが、妻はまだ娶《めと》っていない。家は門地《もんち》も正しいし、親譲りの資産も相当にある。詩酒の風流を恣《ほしいまま》にするには、こんな都合《つごう》の好《い》い身分はない。

実際また王生は、仲の好《い》い友人の趙生《ちょうせい》と一しょに、自由な生活を送っていた。戯《ぎ》を聴《き》きに行く事もある。博《はく》を打って暮らす事もある。あるいはまた一晩中、秦淮《しんわい》あたりの酒家《しゅか》の卓子《たくし》に、酒を飲み明かすことなぞもある。そう云う時には落着いた王生が、花磁盞《かじさん》を前にうっとり、どこかの歌の声に聞き入っていると、陽気な趙生は酢蟹《すがに》を肴に、金華酒《きんかしゅ》の満《まん》を引きながら、盛んに妓品《ぎひん》なぞを論じ立てるのである。

その王生がどう云う訳か、去年の秋以来忘れたように、ぱったり痛飲を試みなくなった。いや、痛飲ばかりではない。吃喝嫖賭《きっかつひょうと》の道楽にも、全然遠のいてしまったのである。趙生を始め大勢の友人たちは、勿論この変化を不思議に思った。王生ももう道楽には、飽きたのかも知れないと云うものがある。いや、どこかに可愛い女が、出来たのだろうと云うものもある。が、肝腎《かんじん》の王生自身は、何度その訳を尋ねられても、ただ微笑を洩らすばかりで、何がどうしたとも返事をしない。

そんな事が一年ほど続いた後《のち》、ある日趙生が久しぶりに、王生の家を訪れると、彼は昨夜《ゆうべ》作ったと云って、元〔#「禾+榎のつくり」、第3水準1-89-46〕体《げんしんたい》の会真詩《かいしんし》三十韻《さんじゅういん》を出して見せた。詩は花やかな対句《ついく》の中に、絶えず嗟嘆《さたん》の意が洩らしてある。恋をしている青年でもなければ、こう云う詩はたとい一行《いちぎょう》でも、書く事が出来ないに違いない。趙生は詩稿を王生に返すと、狡猾《こうかつ》そうにちらりと相手を見ながら、

「君の鶯鶯《おうおう》はどこにいるのだ。」と云った。

「僕の鶯鶯《おうおう》？　そんなものがあるものか。」

「嘘をつき給え。論より証拠はその指環じゃないか。」

なるほど趙生《ちょうせい》が指さした几《つくえ》の上には、紫金碧甸《しこんへきでん》の指環が一つ、読みさした本の上に転がっている。指環の主は勿論男ではない。が、王生《おうせい》はそれを取り上げると、ちょっと顔を暗くしたが、しかし存外平然と、徐《おもむ》ろにこんな話をし出した。

「僕の鶯鶯なぞと云うものはない。が、僕の恋をしている女はある。僕が去年の秋以来、君たちと太白《たいはく》を挙げなくなったのは、確かにその女が出来たからだ。しかしその女と僕との関係は、君たちが想像しているような、ありふれた才子の情事ではない。こう云ったばかりでは何の事だか、勿論君にはのみこめないだろう。いや、のみこめないばかりなら好《い》いが、あるいは万事が嘘のような疑いを抱きたくなるかも知れない。それでは僕も不本意だから、この際君に一切の事情をすっかり打ち明けてしまおうと思う。退屈でもどうか一通り、その女の話を書いてくれ給え。

「僕は君が知っている通り、松江《しょうこう》に田を持っている。そうして毎年秋になると、一年の年貢《ねんぐ》を取り立てるために、僕自身あそこへ下《くだ》って行く。所がちょうど去年の秋、やはり松江へ下った帰りに、舟が渭塘《いとう》のほとりまで来ると、柳や槐《えんじゅ》に囲まれながら、酒旗《しゅき》を出した家が一軒見える。朱塗りの欄干《らんかん》が画《えが》いたように、折れ曲っている容子《ようす》なぞでは、中々大きな構えらしい。そのまた欄干の続いた外には、紅い芙蓉《ふよう》が何十株《なんじっかぶ》も、川の水に影を落している。僕は喉《のど》が渴《かわ》いていたから、早速その酒旗の出ている家へ、舟をつけると云いつけたものだ。

「さてそこへ上《あが》って見ると、案《あん》の定《じょう》家も手広ければ、主《あるじ》の翁《おきな》も卑しくない。その上酒は竹葉青《ちくようせい》、肴《さかな》は鱸《すずき》に蟹《かに》と云うのだから、僕の満足は察してくれ給え。実際僕は久しぶりに、旅愁《りょしゅう》も何も忘れながら、陶然《とうぜん》と盃《さかずき》を口にしていた。その内にふと気がつくと、誰《たれ》か一人幕の陰から、時々こちらを覗《のぞ》くものがある。が、僕はそちらを見るが早いか、すぐに幕の後《うしろ》へ隠れてしまう。そうして僕が眼を外《そ》らせば、じっとまたこちらを見つめている。何だか翡翠《ひすい》の簪《かんざし》や金の耳環《みみわ》が幕の間《あいだ》に、ちらめくような気がするが、確かにそうかどうか判然しない。現に一度なぞは玉のような顔が、ちらりとそこに見えたように思う。が、急にふり返ると、やはりただ幕ばかりが、懶《ものう》そうにだらりと下《さが》っている。そんな事を繰《く》り返している内に、僕はだんだん酒を飲むのが、妙につまらなくなってきたから、何枚かの錢《ぜに》を抛《ほう》り出すと、〔#「勺<夕」、第3水準1-14-76〕

「ところがその晩舟の中に、独りうとうとと眠っていると、僕は夢にもう一度、あの酒旗の出ている家《うち》

へ行った。昼来た時には知らなかったが、家《うち》には門が何重《なんじゅう》もある、その門を皆通り抜けた、一番奥まった家《いえ》の後《うしろ》に、小さな綉閣《しゅうかく》が一軒見える。その前には見事な葡萄棚《ぶどうだな》があり、葡萄棚の下には石を畳《たた》んだ、一丈ばかりの泉水がある。僕はその池のほとりへ来た時、水の中の金魚が月の光に、はっきり数えられたのも覚えている。池の左右に植わっているのは、二株《ふたかぶ》とも垂糸檜《すいしかい》に違いない。それからまた牆《しょう》に寄せては、翠柏《すいはく》の屏《へい》が結んである。その下にあるのは天工のように、石を積んだ築山《つきやま》である。築山の草はことごとく金糸線綉 [ # 「土へん+敦」、第3水準1-15-63 ] 《きんしせんしゅうとん》の属《ぞく》ばかりだから、この頃のうそ寒《さむ》にも凋《しお》れていない。窓の間には彫花《ちょうか》の籠《かご》に、緑色の鸚鵡《おうむ》が飼ってある。その鸚鵡が僕を見ると、「今晚は」と云ったのも忘れられない。軒の下には宙に吊《つ》った、小さな木鶴《もっかく》の一双《ひとつが》いが、煙の立つ線香を啣《くわ》えている。窓の中を覗いて見ると、几《つくえ》の上の古銅瓶《こどうへい》に、孔雀《くじゃく》の尾が何本も挿《さ》してある。その側にある筆硯類《ひっけんるい》は、いずれも清楚《せいそ》と云うほかはない。と思うとまた人を待つように、碧玉の簫《しょう》などもかかっている。壁には四幅《しふく》の金花箋《きんかせん》を貼って、その上に詩が題してある。詩体はどれも蘇東坡《そとうば》の四時《しじ》の詞《し》に倣《なら》ったものらしい。書は確かに趙松雪《ちょうしょうせつ》を学んだと思う筆法である。その詩も一々覚えているが、今は披露《ひろう》する必要もあるまい。それより君に聞いて貰いたいのは、そう云う月明りの部屋の中に、たった一人坐っていた、玉人《ぎょくじん》のような女の事だ。僕はその女を見た時ほど、女の美しさを感じた事はない。」

「有美《ゆうび》閨房秀《けいぼうのしゅう》 天人《てんじん》謫降来《たくこうしきたる》かね。」

趙生《ちょうせい》は微笑しながら、さっき王生《おうせい》が見せた会真詩《かいしんし》の冒頭の二句を口ずさんだ。

「まあ、そんなものだ。」

話したいと云った癖に、王生はそう答えたがり、いつまでも口を噤《つぐ》んでいる。趙生はどうとう待兼ねたように、そっと王生の膝を突いた。

「それからどうしたのだ？」

「それから一しょに話をした。」

「話をしてから？」

「女が玉簫《ぎょくしょう》を吹いて聞かせた。曲《きょく》は落梅風《らくばいふう》だったと思うが、」

「それぎりかい？」

「それがすむとまた話をした。」

「それから？」

「それから急に眼がさめた。眼がさめて見るとさっきの通り、僕は舟の中に眠っている。艙《そう》の外は見渡す限り、茫々とした月夜《つきよ》の水ばかりだ。その時の寂しさは話した所が、天下にわかるものは一人もあるまい。

「それ以来僕の心の中《うち》では、始終あの女の事を思っている。するとまた金陵《きんりょう》へ帰ってからも、不思議に每晚眠りさえすれば、必ずあの家《うち》が夢に見える。しかも一昨日《おととい》の晩なぞは、僕が女に水晶《すいしょう》の双魚《そうぎょ》の扇墜《せんつい》を贈ったら、女は僕に紫金碧珣《しこんへきでん》の指環を抜いて渡してくれた。と思って眼がさめると、扇墜が見えなくなった代りに、いつか僕の枕もとには、この指環が一つ抜き捨ててある。してみれば女に遇《あ》っているのは、全然夢とばかりも思われない。が、夢でなければ何だと云うと、僕も答を失してしまう。

「もし仮に夢だとすれば、僕は夢に見るよりほかに、あの家《うち》の娘を見たことはない。いや、娘がいるかどうか、それさえはつきりとは知らずにいる。が、たといその娘が、実際はこの世にいないのにしても、僕が彼女を思う心は、変る時があるとは考えられない。僕は僕の生きている限り、あの池だの葡萄棚《ぶどうだな》だの緑色の鸚鵡《おうむ》だのと一しょに、やはり夢に見る娘の姿を懐しがらずにはいられまいと思う。僕の話と云うのは、これだけなのだ。」

「なるほど、ありふれた才子の情事ではない。」

趙生《ちょうせい》は半ば憐《あわれ》むように、王生《おうせい》の顔へ眼をやった。

「それでは君はそれ以来、一度もその家《うち》へは行かないのかい。」

「うん。一度も行った事はない。が、もう十日ばかりすると、また松江《しょうこう》へ下《くだ》る事になっている。その時 | 渭塘《いとう》を通ったら、是非あの酒旗《しゅき》の出ている家へ、もう一度舟を寄せて見るつもりだ。」

それから実際十日ばかりすると、王生は例の通り舟を艤《ぎ》して、川下《かわしも》の松江へ下って行った。そうして彼が帰って来た時には、趙生を始め大勢の友人たちは、彼と一しょに舟を上《あが》った少女の美しいのに驚かされた。少女は実際部屋の窓に、緑色の鸚鵡《おうむ》を飼いながら、これも去年の秋 | 幕《ま

く》の陰《かげ》から、そっと隙見《すきみ》をした王生の姿を、絶えず夢に見ていたそうである。  
「不思議な事もあればあるものだ。何しろ先方でもいつのまにか、水晶の双魚の扇墜が、枕もとにあったと云うのだから、」

趙生はこう遇う人毎《ひとごと》に、王生の話を吹聴《ふいちょう》した。最後にその話が伝わったのは、銭塘《せんとう》の文人 | 瞿祐《くゆう》である。瞿祐はすぐにこの話から、美しい渭塘奇遇記《いとうきぐうき》を書いた。……

× × ×

小説家 どうです、こんな調子では？

編輯者 ロマンティックな所は好《い》いようです。とにかくその小品《しょうひん》を貰う事にしましょう。

小説家 待って下さい。まだ後《あと》が少し残っているのです。ええと、美しい渭塘奇遇記《いとうきぐうき》を書いた。ここまでですね。

× × ×

しかし銭塘《せんとう》の瞿祐《くゆう》は勿論、趙生《ちょうせい》なぞの友人たちも、王生《おうせい》夫婦を載《の》せた舟が、渭塘《いとう》の酒家《しゅか》を離れた時、彼が少女と交換した、下《しも》のような会話を知らなかった。

「やっと芝居が無事にすんだね。おれはお前の阿父《おとう》さんに、毎晩お前の夢を見ると云う、小説じみた嘘をつきながら、何度 | 冷々《ひやひや》したかわからないぜ。」

「私《わたし》もそれは心配でしたわ。あなたは金陵《きんりょう》の御友だちにも、やっぱり嘘をおつきなすったの。」

「ああ、やっぱり嘘をついたよ。始めは何とも云わなかったのだが、ふと友達にこの指環《ゆびわ》を見つけられたものだから、やむを得ず阿父さんに話す筈の、夢の話をしてしまったのさ。」

「ではほんとうの事を知っているのは、一人もほかにはない訳ですわね。去年の秋あなたが私の部屋へ、忍んでいらした事を知っているのは、」

「私。私。」

二人は声のした方へ、同時に驚いた眼をやった。そうしてすぐに笑い出した。帆檣《ほばしら》に吊った彫花《ちょうか》の籠には、緑色の鸚鵡《おうむ》が賢そうに、王生と少女とを見下している。……

× × ×

編輯者 それは蛇足《だそく》です。折角の読者の感興をぶち壊すようなものじゃありませんか？ この小品が雑誌に載るのだったら、是非とも末段だけは削《けず》って貰います。

小説家 まだ最後ではないのです。もう少し後《あと》があるのですから、まあ、我慢して聞いて下さい。

× × ×

しかし銭塘の瞿祐は勿論、幸福に満ちた王生夫婦も、舟が渭塘を離れた時、少女の父母が交換した、下《しも》のような会話を知らなかった。父母は二人とも目《ま》かげをしながら、水際《みずぎわ》の柳や槐《えんじゅ》の陰に、その舟を見送っていたのである。

「お婆さん。」

「お爺さん。」

「まずまず無事に芝居もすむし、こんな目出たい事はないね。」

「ほんとうにこんな目出たい事には、もう二度とは遇《あ》えませんね。ただ私は娘や婿《むこ》の、苦しそうな嘘を聞いているのが、それはそれは苦勞でしたよ。お爺さんは何も知らないように、黙っていると御云いなすったから、一生懸命にすましていましたが、今更《いまさら》あんな嘘をつかなくっても、すぐに一しょにはなれるでしょうに、」

「まあ、そうやかましく云わずにやれ。娘も婿も極《きま》り悪さに、智慧袋《ちえぶくろ》を絞ってついた嘘だ。その上婿の身になれば、ああでも云わぬと、一人娘は、容易にくれまいと思ったかも知れぬ。お婆さん、お前はどうかと云うのだ。こんな目出たい婚礼に、泣いてばかりいてはすまないじゃないか？」

「お爺さん。お前さんこそ泣いている癖に……」

× × ×

小説家 もう五六枚でおしまいです。次手《ついで》に残りも読んで見ましょう。

編輯者 いや、もうその先は沢山です。ちょいとその原稿を貸して下さい。あなたに黙って置くと、だんだん作品が悪くなりそうです。今までも途中で切った方が、遥《はるか》に好かったと思いますが、とにかくこの小品《しょうひん》は貰いますから、そのつもりでいて下さい。

小説家 そこで切られては困るのですが、

編輯者 おや、もうよほど急がないと、五時の急行には間《ま》に合いませんよ。原稿の事なぞはかまっていずに、早く自動車でも御呼びなさい。

小説家 そうですか。それは大変だ。ではさようなら。何分《なにぶん》よろしく。

編輯者 さようなら、御機嫌好う。

[ # 地から1字上げ ] (大正十年三月)

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。